

## 訪ねてみました

# 大正区の渡船＝大阪市 水の都で暮らしを結ぶ

大阪

毎日新聞 | 2021/9/22 地方版 有料記事 1257文字



地元の人の生活の足になっている渡船＝大阪市大正区で、中川博史撮影

### <おでかけ>

都会でありながら今も渡船が行き来しているというのは、さすがに水都・大阪だけある。通勤通学や買い物に利用する地元の人たちの生活の足になっているようだが、どんな光景や趣なのか、興味をそそられる。大阪市内8カ所のうち7カ所が大正区に集まっているという。行ってみよう！【中川博史】

渡船は大阪市が運営している。1935（昭和10）年ごろには31カ所の渡船場があり、年間に徒歩での利用者が約5750万人、自転車の利用が約1440万台に上ったが、戦災や道路整備などによって次第に姿を消していったという。2020年は約150万人の利用があった。



大阪市内の渡船場 (1) 天保山 (2) 甚兵衛 (3) 千歳 (4) 落合上 (5) 落合下 (6) 千本松 (7) 船町 (8) 木津川 (1) は港区発。他は大正区発。

大正区は周囲を運河や川に囲まれた島みたいな地形だから、対岸との往来には渡船が手っ取り早い。もちろん橋もあるにはあるが、大きな船が通過できるようなアーチ状だと、歩いて渡るのにひと苦労らしい。

JR大正駅前からバスと徒歩で南に約20分。甚兵衛（じんべえ）渡船場（同区泉尾7）に到着した。前を流れるのは尻無川。近隣には物流施設や工場が立ち並ぶ。

自転車を押した人たちがスロープを降りてきた。乗船場の時刻表を見ると、大体10～15分間隔で運航していて、わりと頻繁だ。朝のラッシュ時には2隻が運航する。1日平均の利用者は約1000人。8カ所の中で一番多い。



1日平均約1000人の利用があるという甚兵衛渡船場 = 大阪市大正区で、中川博史撮影

ちょっと待って乗船する。対岸までは94メートル。「船はいいなあ」などと感傷に浸る暇もなく、1分足らずで対岸に着いた。既に自転車が列を作っていて、渡船は欠かすことのできない交通手段なのだと実感する。



対岸がすぐ先に見えるのは渡船ならではの = 大阪市大正区で、中川博史撮影

甚兵衛渡船場から20分ほど南に歩くと、千歳（ちとせ）渡船場（同区北恩加島2）があった。大正内港をはさみ、対岸（同区鶴町4）までは371メートル。でっかい千歳橋を見上げたり港内を見渡したりしながらの水の上移動は、クルージングとまではいかななくても、ちょっと気分が高揚する。

今度は東に向かい、約30分で落合上渡船場（同区千島1）。店舗や住宅の並びにこぢんまりとあるので、ぼんやりしていると見過ごしてしまう。対岸までは100メートル。すぐ北側に木津川水門がある。出発を待っていると、ロードバイクに乗ったおっちゃんが息を切らしてやってきた。そう言えば、スポーツ自転車に乗ってサイクリング気分で渡船巡りをする人たちが結構いるらしい。



千歳橋を見上げながらの運航。気持ちがいい＝大阪市大正区で、中川博史撮影

3カ所を回って所要時間2時間半。船とバスの時刻を事前に調べればよかった。行き当たりばったりではきつい。膝がカクカクする。

自然の中で川面をゆったりと進むわけではないし、ましてや船頭さんが笠（かさ）や蓑（みの）をまとっているわけでもない。それでも、暮らしの息づかいを感じることができて、味わいがある。街中の渡船、なかなかオツなものだ。

#### ■大阪市営渡船

1891（明治24）年、民間が運営していた渡船を大阪府が管理。1907年（同40）年に大阪市営になった。



落合上渡船場の北側には木津川水門が見える＝大阪市大正区で、中川博史撮影

乗船は無料。運行時間は乗船場によって異なるが、おおむね午前6時台から午後9時台まで。

大阪市河川・渡船管理事務所（06・6536・5295）。



自転車を押しながら乗船＝大阪市港区で、中川博史撮影

